担当教官:青山 亨(あおやま とおる). 東京外国語大学外国語学部インドネシア語
研究室:633. オフィスアワー:月曜日2限. 電話:042-330-5300. メール:taoyama@tufs.ac.jp
ウェブサイト:http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/aoyama/
授業のお知らせ:http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/aoyama/

授業科目	アジア文化論 II 講義(専修専門・総合文化コース)6082
授業題目	東南アジア古典文化論(1)(6090)。2 学期の東南アジア古典文化論(2)(6091)に続く。
対象学年	3 年生(2 年生も可)
開講学期	1 学期
曜日・時限	木曜・4 限
教室	115
共通科目など	地域専門科目・東南アジア課程(3530/3531)および専修専門科目・地域国際コース(7223/7224)と共通。多摩地区国立5大学単位互換制度開放科目。市民聴講生受け入れ。
授業の目標	東南アジアの古典文化は、土着の精霊信仰・祖先崇拝の基層のうえに、ヒンドゥー・大乗仏教をもたらしたインド文明の影響を強く受けている。この講義では、インドネシアのジャワの例を中心に取り扱いつつも、東南アジアの古典文化を概観し、現代社会にも力強く生きているこの「古典的文化」の特徴を学ぶ。
教材・参考書等	適宜プリントを配付する。参考書は授業中に指示する。
成績評価の方法	出席(30%)とレポート(70%)で評価する。
受講上の注意	1.「インドネシア文化論」演習を受講する者はこの講義を履修しておくことが望ましい。 2. 年度末までに引き取られなかった提出物は処分します。

1. 授業のねらい(上記の目標を参照)

2. 授業の内容・計画 (改訂版 2010-04-15)

主として以下の事項について概説する。東南アジア古典文化に関連したビデオ教材も適宜使用する。

■1学期の授業計画■

1)導入

・東南アジア古典文化とは何か ・東南アジアの歴史の仕組み

2)基層文化としての精霊信仰

3)インド文化の東漸

・「長い助走期間」と「爆発的な東漸」 ・初期王権の成立

4)大乗仏教の伝播

・インドという土壌に育った宗教:バラモン教、仏教、ヒンドゥー教 ・ボロブドゥール寺院

5)ヒンドゥー教の伝播

・プランバナン寺院 ・アンコールワット寺院

6)インド化を考える

・「8世紀の仏教世界」

■2学期の授業計画■

1)導入

・オリエンテーション

2)インド的世界観と歴史観

3)神々の時代:乳海攪拌

・アンコールワット

4)人間対魔物:ラーマーヤナ

・プランバナン寺院、ラーマキエン、スンドラタリ

5)人間対人間—バラタ族の決戦:マハーバーラタ

・映画版、ワヤン

6)ブッダの生涯

・ビルマ語絵入り写本、ボロブドゥール寺院、ジャータカ

参考図書1：東南アジアについての概要を知るためのもの

1. 石井米雄ほか監修. 2008.『新版 東南アジアを知る事典』平凡社. 東南アジアについて効率よく調べるために便利な事典. 1986年初版の改訂版.
2. 事典シリーズ. 同朋出版社. インドネシア, タイ, フィリピン、ベトナムの4か国の事典が出ている.
3. 京都大学東南アジア研究センター編. 1997.『事典東南アジア―風土・生態・環境』弘文堂. 2ページ見開きで東南アジアに関する主要な事項を解説した読む事典.
4. もっと知りたい東南アジアシリーズ. 弘文堂. 東南アジアの各国編が出ている.
5. 暮らしがわかるアジア読本シリーズ. 河出書房新社. インドネシア, ヴェトナム, タイ, マレーシア, ビルマ, フィリピン各国編が出ている. 生活に密着したテーマで構成された各国案内.
6. ○○を知るための50章シリーズ（国によっては50章でない場合もある）. 明石書店. 東南アジアの各国編が出ている.
7. 歴史教育者協議会編. 1995.『シリーズ知っておきたい東南アジア』1と2巻および『シリーズ知っておきたいフィリピンと太平洋』青木書店. 高校生を対象にした読みやすい概論.
8. 石井米雄・桜井由躬雄編. 1999.『東南アジア史 I 大陸部』山川出版社. 最新の東南アジア大陸部の通史.
9. 池端雪浦編. 1999.『東南アジア史 II 島嶼部』山川出版社. 最新の東南アジア島嶼部の通史.
10. 東南アジア学会ウェブサイト東南アジア関連リンク集も便利である【URL更新済み】. http://www.jsseas.org/link/gateway.html

参考図書2：講義の主題全体に関わるもの

青山 亨. 1997.「古代ジャワ社会における自己と他者」辛島昇・高山博編『地域のイメージ』（地域の世界史2）. 山川出版社. pp.94-137.

———. 1998.「インドネシアにおけるラーマ物語の受容と伝承」金子量重ほか編『ラーマーヤナの宇宙』春秋社. pp.140-163.

———. 2001a.「東ジャワの統一王権―アイルランガ政権からクディリ王国へ」石澤良昭編『東南アジア古代国家の成立と展開』（講座東南アジア史2）岩波書店. pp.141-167.

———. 2001b.「シンガサリ=マジャパヒト王国」石澤良昭（編）『東南アジア古代国家の成立と展開』（講座東南アジア史2）岩波書店. pp.197-230.

———. 2005.「南海の女王ラトゥ・キドゥル―19世紀ジャワにおけるイスラームをめぐる文化的表象のせめぎあい」『総合文化研究』8:35-58.

———. 2007.「インド化再考―東南アジアとインド文明との対話―」『総合文化研究』10: 122-143.

———. 2008.「口承文芸」「文学（古典文学）」「ラーマーヤナ」.『新版 東南アジアを知る事典』の項目.

———. 2010a.「映画『オペラ・ジャワ』に見るラーマーヤナの変容」『総合文化研究』13: 37-60.

———. 2010b.「サンスクリット化」奈良康明・下田正弘・林行夫編『静と動の仏教』（新アジア仏教史4 スリランカ・東南アジア）佼成出版社.

Heine-Geldern, Robert. 1956. Conceptions of State and Kingship in Southeast Asia (Data Paper 18), Cornell University.

ハイネ＝ゲルデルン、ロベルト. 1972.「東南アジアにおける国家と王権の観念」（大林太良訳）大林太良編『神話・社会・世界観』角川書店.

追加（日本の状況と比較するための文献）

大野徹. 2001.『日本人の神』（新潮文庫）新潮社.

末木文美士. 2006.『日本宗教史』（岩波新書1003）岩波書店.

菅野覚明. 2001.『神道の逆襲』（講談社現代新書）講談社.

山本ひろ子. 1998.『中世神話』（岩波新書）岩波書店.

義江彰夫. 1996.『神仏習合』（岩波新書）岩波書店.

参考資料

「口承文芸」（『新版　東南アジアの事典』）

口頭で伝承され、語られることを基本とする文芸活動の総称。

口承文芸は、社会における共有知識の伝達、情緒的連帯感の育成、娯楽の提供といった種々の機能を持っており、その形態も、専門的語り手による多数の聴衆に対する長時間にわたる英雄武勇伝の朗唱、年長の親族による年少者に対する昔話の語り聞かせ、歌垣における男女の即興的な掛け合いなど多様である。

東南アジアには、古くからインド系文字、漢字、アラビア文字が伝来したが、多くの社会では長らく宮廷が書承文学を占有しており、民衆の間では文字は知られていても口承文芸が文芸活動の中心であった。このような社会では、書承の古典文学が口承文芸を元にして書かれたり、口承文芸であっても創作と伝承の過程に書承テキストが使われたりするなど、書承と口承の文芸は共存し補完する関係にあった。また、少数民族の中には無文字社会も少なくなく、書承を介在しない口承文芸は近年まで行われてきたが、教育の普及で純粋に口承のみに依存する社会は消滅しつつある。

近代文学の言語は国民国家の公用語に収斂する傾向があるが、口承文芸は伝承している個別の言語と不可分の関係にある。たとえばインドネシア文学は事実上インドネシア語の文学であるが、それと同じ意味でのインドネシア口承文芸は存在せず、実態として存在するのは、マレー語、ジャワ語、スンダ語などの個別の言語、民族集団が伝承する口承文芸である。

口承文芸には、語られる内容、表現の形式、行為（パフォーマンス）の 3 つの側面がある。文字を知る社会においては、語られる内容は、口頭によって伝承あるいは創作される場合も、書承によって伝承あるいは創作される場合もあった。作品として固定される書承テキストと違って、バリエーションが多く、主題という緩やかな枠組みでまとまりを持つ。表現の形式は、定型的な韻文が基本であり、伝承する言語に特有な音声的特徴が活用されている。パフォーマンスは、朗唱や朗詠という形をとる。語られる場や語り手と聞き手の関係もパフォーマンスのあり方に影響を与える。口承文芸は他の芸能とも深く関連しており、楽器による伴奏や節回しに重点が置かれると歌謡に、身振りなどの仕草に重点が置かれると舞踊や演劇に近づく。

語られる内容には、祈願文、まじない、なぞなぞ、格言、ことわざ、詩などのように物語形式でないものと、主題によって神話、伝説、民話などに分類される物語形式のものがある。神話は、神々や精霊が登場し、世界の創成を語る。伝説は、稲の起源など事物や人物に関する由来を語るものである。王国の建国の由来を語る物語などは、年代記、武勇伝、歴史伝承、叙事詩と呼ばれることもある。王朝の始祖が神である場合には主題的に神話と重なる。昔話は、テーマの性格によって動物物語、滑稽話、頓知話などに区分されることが多い。

物語の主題の起源としては、東南アジアの基層文化に遡る要素の他に、ヒンドゥー教、大乗仏教、上座仏教を含むインド文化、中国文化、イスラーム文化、ヨーロッパ文化から伝播した要素が加わっている。羽衣伝説などの日本の民間説話と似た伝承も各地に見られる。

口承文芸は、伝承する言語ごとに、主題、形式、パフォーマンスの組み合わせによって固有のジャンルを形成している。東南アジア島嶼部では、フィリピンに口承による叙事詩が残っており、イフガオ語社会の村の祭礼で女たちによって語られる英雄たちの力比べの物語『フドゥフドゥ』や、イロカノ語社会で語られる武勇伝『ラム・アン』などが知られる。文字をもつ社会では、マレー語やスンダ語社会のパントゥンと呼ばれる韻文形式が有名である。マレー語のパントゥンは、交叉韻を踏む 4 行 1 連からなり、前半の 2 行が導入部で後半の 2 行が本体となる。複数の参加者が即興で連歌のように歌をつないでいく一種の社交文芸である。他方、スンダ語のパントゥンでは語り手が伴奏を伴って一晩かけてパントゥン形式で物語を語る。1000 連を超える長編『ルトゥン・カサルン』が有名である。ジャワ語社会では、ダランと呼ばれる人形遣いがガムラン音楽の伴奏を伴って主としてヒンドゥー教叙事詩に取材した長編を一晩かけて演じるワヤン・クリ（人形影絵芝居）に人気がある。地語りと登場人物の台詞を語り分けるダランの話芸が重要視される。

大陸部では、ミャンマー、タイ、ラオス、ベトナム、中国雲南省にかけて生活するアカ（ハニ）、ラフ、モンなどの無文字社会であった山岳少数民族の間に口承文芸が広く残っている。文字を持つ社会では、ラオ語社会のラムとよばれる歌謡が現在でも人気がある。村の祭礼などでモーラムと呼ばれる歌い手が独唱または男女の掛け合いでケーン（笙）などの楽器伴奏を伴って朗唱する。

近年、口承文芸を無形文化財として保護する機運が国際的に高まっており、口承文芸の記録や保存、後継者育成の活動や教育がおこなわれている

「文学（古典文学）」（『新版　東南アジアの事典』）

東南アジアでは 19 世紀末から 20 世紀初にかけて、小説に代表される西欧起源の近代的文学作品が作られ始めたが、それに先立つ伝統的文学は、今日も美的、倫理的な価値規範として参照されるべき古典文学の地位を保持している。

古典文学の創作が行われた時期は、印刷技術が普及する以前であり、書承の文学作品は、初期には貝葉、後代には洋紙などを媒体とする手稿本として筆記され読み継がれた。文芸活動が口承を中心におこなわれた時代の産物であることを反映して、作品の形態は朗誦を前提とする韻文が主体であり、作品の主題や物語の構成の面でも口承文芸との間に深い相互影響が見られた

古典文学の創作活動の中心的な拠点は宮廷であり、王族、宮廷詩人、貴族文人などのエリート階層が文芸活動に携わり、王も文芸の保護者として作品の創作を注文したり、自ら創作に携わったりした。したがって、作品の主題の多くは庶民生活と無縁であり、王族階級の英雄が主人公となり、宮廷社会を舞台として、時に神、天女、羅刹といった超自然的な存在とかかわりつつ、合戦や恋愛などの冒険を経験するといった内容が中心である。また、その時代の宮廷に影響を持った外部の文明が生み出した作品の翻訳または翻案であることが多いが、翻訳や翻案と言っても、単なる言語的置き換えではなく、それぞれの言語の文学的伝統において古典作品として現在まで高く評価されている。

東南アジアの古典文学は、中国文明の影響が続いたベトナム、キリスト教の影響を受けたフィリピンという特筆すべき例外を除くと、古代から、インド起源のヒンドゥー教と大乗仏教の影響を強く受けたが、13 世紀以降は、大陸部では上座仏教、島嶼部ではイスラームの影響を受けるようになった。全体を通して見ると、初期には宗教的主題のもとで王の事跡を讃える作品が多く、後代になると、王朝の系譜を軸として民族としての連帯を強調する年代記が増加するという傾向が見られる。

現存する最古の東南アジアの文学作品は、ヒンドゥー教叙事詩に取材した 9 世紀の古ジャワ語作品『ラーマーヤナ・カカウィン』である。ジャワ語社会では、その後も、ヒンドゥー教叙事詩に取材したクディリ王朝時代の『バーラタユッダ』や、仏教説話に基づくマジャパヒト王朝時代の『スタソーマ』などの作品が輩出し、イスラーム伝来以降はマタラム王朝の『ババッド・タナ・ジャウィ』に代表される王朝年代記が数多く書かれた。島嶼部のマレー語社会では、イスラーム伝来以降、マラッカ王国の栄光を描く『スジャラ・ムラユ』（マレー年代記）や『ヒカヤット・ハントゥア』に代表される散文の年代記が盛んに作られた。

タイでは、アユタヤ王朝以降、多くの韻文詩・詩劇が作られ、とくに 17 世紀のナーラーイ王治世期には、王命によってパーリ語上座仏教経典の仏陀前世物語であるジャータカが、タイ語に翻訳されるなどして、古典文学の基礎が作られた。また、アユタヤ王朝時代に注目される作品としては、マレー人捕虜が伝えたジャワ起源の物語に取材した詩劇『イナオ』がある。ラタナコーシン王朝時代には、『ラーマーヤナ』に取材した『ラーマキエン』（ラーマの栄光）がラーマ 1 世の命で書かれたが、ラーマ 2 世治世期になると民衆出身の詩人によってタイ的な特徴が強調された傑作『クンチャーン・クンペーン』が書かれた。同じく上座部社会のビルマでは、アヴァ王朝時代にはパーリ語仏典に取材した作品が多かったが、タウングー王朝時代には王族による戦記文学なども作られた。コンバウン王朝になると、アユタヤ王朝攻略で移入されたラーマーヤナやイナオに取材する詩劇や、『玻璃王宮大王統史』などの